

三笑

シテ 恵遠禪師

ツレ 陶淵明

同 陸修靜

地は 唐土
季は 十一月

「晋の惠遠廬山の下に居して。三十余年隱山を出で
ず。白蓮社を結び並びに十八の賢あり。其外数百
人世を捨て榮を忘れて。共に西方を誦し六字を礼
して此草庵に遊止す。

下歌
「かくて流れを枕とし。岩に口を漱ぎて。

上歌
「行住座臥の行ひに。く。座禪の床を洩る月も。
西に傾くをりふしは。洞煙谷雲の内よりも。瀑布
の滝の白妙に。あけぼのゝ山の姿。たとへん方ぞ
なかりける。

「雲無心にして以て岫を出で。鳥飛ぶが如くに倦ん
で。還る事をやらすらん。

歌
「頃もはや。霜降月の曙に。く。野山の草の色も
はや。散る紅葉々に移ろひて。枯野になれど白菊
の。花はさながら紅の。八入に見ゆるけしきかな。

く。

修静是まで参りて候。

シテ詞
「其時禪師は白蓮社を出で。書を以て淵明を招きければ。

ツレ二人
「二人は共に拝をなし。

地
「廬山のさかしき石橋を。心しづかに渡りつゝ。巖に腰をかけ。瀑布をながめ給へり。三千世界は眼に尽き。十二因縁は心の内に際もなし。

淵詞
「如何に恵遠禪師に申すべき事の候。

シテ詞
「何事にて候ふぞ。

淵
「さて廬山に至らざらん者は。是れ僧にあらずと申し候ふよなふ。

シテ
「實にく左様に申し候。

淵
「さてく瀑布と云ふ事は。如何なる謂のあるやらん。

シテ
「いやく異なる事はなし。万仞名を得て瀑布といふ。

陸 「日香炉を照らして紫煙をなす。

シテ詞 「遠く見れば織るが如くにして天台に掛く。

淵 「宝尺を疑ふ事を休めよ度りがたし。

シテ 「直に金刀の剪裁し易きを恐る。

陸 「傾き来つて石上に春雷をなす。

淵 「知らんと欲す是銀河の水なる事を。

シテ 「人間に墮落して。

陸 「合して。

シテ 「却つて。

地 「廻る。

クセ 「三国無双の此滝を。今まで挾せぬ心こそ愚かなり
けれ。もとより琴、詩酒の友なれば。心静かに昔を
いざや語らん。

「そもそも此淵明と申すは。彭沢の令となる。官に
ある事八十余日。印を解いて去るとかや。日夜に
酒を愛し。松菊を翫ぶ。菊を東籬の下に採つて。

南山を見る事も。君に忠あるゆゑとかや。

シテ
「又陸修靜は。

地 「宋の明帝の御時に。仙の法を学んで。陸道士と申すとか。後には当山の簡寂觀に。隠居してましませり。此人々は天下にも。並ぶ方もなき事なれば。

廬山の虎渓にも。劣らぬ光なりけり。

シテ 「菊の白露積り積つて。不老不死の薬の泉。よも尽きじ。

地 「いく万代も限らじな。 (舞)

地 「さす盃の廻る夜も。 (舞) 明くれば暮るゝも白菊の。花を肴に立ち舞ふ袂。酒狂の舞とや人の見ん。

(樂)

シテ
「万代を。

地 「万代を。 (樂) 松は久しき例なり。 (樂)

シテ 「年を老松も。緑は若木の姫小松。

地 「四季にも同じ葉色の常磐木の。松菊を愛し。かな

たこなたへ。足もとは泥々々々と。苔むす橋をよ
ろめき給へば。淵陸左右に介錯し給ひて。虎渓を
遙に出で給へば。淵明禪師に。さて禁足は破らせ
給ふかと。一度にどつと手を拍ち笑つて。三笑の
昔となりにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹著